

## 反省と調和

高橋 信次

あの世とこの世のちがいは、この世の執着の有無にあるといえよう。本来、人の魂は生き通しの永遠の生命であり、思うことが現われる自由と創造の世界だけである。人の魂が肉体という乗り舟に乗ると、肉体にまつわる執着に心がとらわれ、その執着心が魂を汚し、心の眼をふさいでしまう。

人の魂が、出生と同時に、盲目同然となるのは、周囲の状況、人の心の在り方が肉中の生活に流されているためであり、幼い心もそれに染まり、盲目となつてゆくからである。もし人びとの心が魂の永遠を知り、執着の重荷を悟るようになり、さまざまな習慣、思想、環境、教育がそうした方向に向けられるようになると、幼い心はそれに眼をひらき、盲目の人生を歩まないで済むようになろう。

子どもの心は白紙であり、赤にも青にも染まってゆく。染めてゆく者は、ほかならぬ両親の生き方であり、大人たちの考え方や行動にある。日和見の親には日和見の子ができるようし、愚痴の家庭には不満分子を育てよう。子が親に似るのは、親の生き方を子が真似るからだ。

こうしたさまざま執着は、やがて人びとのカルマをつくり、肉体を脱ぎ去つても容易に離れることがない。苦しみはある世に行つてからもつづく。その苦痛はこの世よりひどいものだ。なぜかというと、肉体があると肉体の環境が心の負担を軽くし、いつときまざわしてくれるからだ。たとえば、心配ごとがあつて夜寝られないとする。する

ところが、肉体のない心の世界は、心だけがすべてであり、肉体の習慣、執着を持ちこめば、その波動の渦のなかに自己を置くことになり、肉体の便法を借りたくても借りることができない。腹痛で苦しみながら死後の世界に入れば、その腹痛の苦しみがついてまわる。肉体のない自己を発見するまでその苦しみはつづく。肉体の苦しみ、心の悩みは、ほかならぬ肉の身を通しての執着の現れであり、これがあるうちは人の生命はすこやかに生きられないし、死後の世界は執着の分量に応じて厳しいものとなる。

また自己を愛することなく人をいかに愛したか。これもまた、死後の世界の生き方を決めてゆこう。

人の生命は肉体の生死にかかりなく、生き通しの魂である。肉の世界には肉の生き方もあらうが、肉は心の映し世であり、肉のなかにあつても心に影をつくらぬ生き方が大事であろう。

心に影をつくらぬ。つまり執着から遠離する。愛深き自己を悟る。そうするには、生まれから今日までの想念と行為を洗い直し、執着の原因となるものを取り去ることだ。反省を通して心を軽くすることは、肉体をも軽くし、いまの生活を安心にし、死後の生活の安らぎにも通じてくる。

反省と調和の生活を忘れてはならない。